

令和4年度  
非核平和広島派遣事業  
— 報告書 —



愛 西 市

## 愛西市の平和に関する取組について

愛西市は、平成 17（2005）年 9 月 9 日に「非核・平和都市宣言」をしております。戦後 60 年を迎え、核兵器の脅威と人類の恒久平和を願い、愛西市議会定例会にて提案、議決されました。また、人類の恒久平和の実現に寄与するために、世界の都市と都市が国境を越え、思想・信条の違いを乗り越えて連携し、核兵器の廃絶に向けて努力するという「平和首長会議」の趣旨に賛同し、平成 24（2012）年 9 月に加盟いたしました。

終戦を迎えてから本年度で 77 年が経過し、戦争を直接体験された方々や遺族の方々の高齢化が着々と進んでおり、戦争の記憶がますます風化していくことが懸念されます。世界各地では、紛争や侵攻が発生するなど、平和を脅かす動きが加速しております。本市としましても、将来を担う若い世代に戦争を体験させないという恒久平和への誓いを引き継ぐ責務を果たしていかなければなりません。

本市では、毎年、市内の中学生を広島へ派遣し、平和の尊さなどを学んでいただく「非核平和広島派遣事業」を実施しております。令和 2 年度、3 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により事業が中止となりましたが、令和 4 年度については、8 月 5 日、6 日の 2 日間にわたり、新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で、愛西市の代表として中学生 23 名を派遣いたしました。また、引率者として、教諭 4 名、市職員 2 名が同行しました。

非核平和広島派遣事業に先立ち、市民の皆様の平和への祈りを届けるために、市内各所で折鶴コーナーを設置し、折鶴の募集を行いました。集まった折鶴は繋いで千羽鶴にし、平和記念公園内にある「原爆の子の像」に捧げていただくとともに、広島平和記念資料館の見学や平和記念式典への参列などを通じて、戦争の恐ろしさ、平和の尊さについて学んでいただきました。

愛西市は、平和の尊さを将来にわたって伝えていくために、今後も平和な世界の実現に向けた各種取組を進めてまいります。

# 愛西市非核・平和都市宣言

世界の恒久平和は人類共通の念願であり、核兵器の廃絶は生きとし生けるものの死活にかかわる最も重要かつ緊急の課題となっている。

我が国は、世界最初で唯一の被爆国であり、核兵器の恐ろしさや被爆者の今なお続く苦しみを声を大にして全世界の人々に強く訴え、二度とあの惨禍を繰り返させてはならない。

愛西市は、非核三原則を遵守し、核兵器の廃絶と人類の恒久平和のために努力することを決意し、ここに議会の議決をもって「非核・平和都市」宣言をする。

平成17年9月9日

愛知県愛西市

## 令和4年度非核平和広島派遣事業（概要）

### 目的

愛西市内の中学生を広島県広島市へ派遣し、平和記念公園・原爆ドーム・平和記念資料館等の見学をするとともに、8月6日に広島市において開催される平和記念式典に参列し、平和の尊さを学ぶ機会とする。

また、引率教諭は、行程中生徒を指導し、自身も平和について学んで自己啓発するとともに、学校での平和教育等に活かすこととする。

### 派遣団

愛西市立中学校の3年生23名及び引率者6名（教諭4名・市職員2名）

#### ・生徒（23名）

（佐屋中学校）			
荒木 哉太	荻窪 倫也	山里 風羽	伊藤 香乃
（永和中学校）			
佐藤 要	神田 龍希	林 ななみ	山森 優
（立田中学校）			
小野田 尚輝	黒田 淳斗	岡部 乃希美	神田 和奏
（八開中学校）			
関野 創大	安田 有希	可知 紅実	伊藤 榛香
（佐織中学校）			
浅井 陽翔	中野 里美	小林 京平	浅野 翠月
（佐織西中学校）			
安立 萌杏	伊藤 陽	安部 純之介	

#### ・引率者（6名）

布目 恒平（永和中学校）	大戸 裕明（立田中学校）
原 雛（八開中学校）	関山 麗華（佐織西中学校）
市職員2名	

### 実施日及び場所

- ・派遣説明会：令和4年7月6日（水）  
（愛西市役所）
- ・派遣日程：令和4年8月5日（金）～8月6日（土）  
（広島県広島市）

## 活動内容

- 派遣説明会への参加
- 平和記念公園や原爆ドーム、平和記念資料館等の施設見学
- 平和記念式典への参列
- 派遣事業感想文の作成
- 各中学校において派遣生徒による事業報告会の実施
- 翌年の愛西市平和祈念式において代表生徒4名による感想文発表

# — 派遣生徒感想文 —



(原爆ドーム前にて撮影)

## ノーモア・・・

佐屋中学校 荒木 哉太

「ノーモア・ヒロシマ ノーモア・ナガサキ」という言葉を聞いたことはありますが、僕たちは、今回の平和派遣事業で核の恐ろしさについて知ることができました。1945年8月6日、広島に世界で初めて原子爆弾が落とされました。広島の平和記念公園には平和を願うシンボルがたくさんあるなと感じました。

平和記念資料館の展示物は衝撃的でした。原子爆弾投下直後の灰色の広島。がれきの山、火傷を負った人、焼け焦げた三輪車。日常の生活が一瞬にして無くなったことを感じました。

僕は、原子爆弾について少しは知っているつもりでした。しかし、平和記念資料館を見学して思ったことは、今までは本やテレビで知ったつもりでいたことです。平和記念資料館に展示されていたのは、本やテレビではわからない「もの」でした。

戦争が終わり77年になる広島は、一見すると、何も無い平和な街です。しかし、崩れかけている建物がそのまま残った「原子爆弾ドーム。」原子爆弾投下から77年たった今でも僕たちに原子爆弾の悲惨さ、そして、平和の大切さを伝えていきます。100年後、200年後の人々にも平和への思いをつなげていくことが大切だと考えました。

現在、15,000個ある地球上の核兵器。少しでも無くすことが大切だと思いました。

「ノーモア・ヒロシマ ノーモア・ナガサキ」この思いを世界に伝えたいです。

## 非核平和広島派遣事業に参加して

佐屋中学校 荻窪 倫也

非核平和広島派遣事業に参加して、私は、このような惨劇を二度と引き起こしてはならないと痛感しました。私がそのように思った理由は、平和記念資料館で展示されていたいくつかの資料が印象的だったからです。

一つ目は、「人影の石」です。人影の石は、住友銀行広島支店の入口階段を切り出して移設されたものです。銀行の開店前に階段に腰かけていた人は、近距離で原爆が炸裂し、逃げる事ができないままその場で死亡したとされています。逃げる事のできないことへの恐怖がどのようなものだったのかが計り知れないと思いました。原爆の強烈な熱線により階段は白っぽく変色し、腰掛けていた部分が影のように黒くなって残ったそうです。

二つ目は、原子爆弾の被害を受けたご遺体の写真です。すでに原型をとどめていないものが非常に多くその凄惨さに息を呑みました。

そのほかにも様々な原爆やその被害者の方々に関する資料を見学し、凄惨や残虐などという言葉では到底表すことのできないような状況だったことが伝わってきました。

原爆の熱線で火傷をして、川に入り亡くなった方々が多数いたために遺体の流れる川になっていたということも知りました。その状態で川に入られた方々はとても苦しまれたそうです。原爆が炸裂してからはご遺体の埋葬や火葬作業などが行われたそうです。しかしその時点でもどのご遺体がどの方だったかなどの判別もつかなかったそうです。中学の国語の授業で挨拶という詩を学んだことがあります。そこでもその凄惨さが詩に記してあります。なぜ人間は、原爆を作り未だに使用しようとしているのでしょうか。日本は唯一の被爆国で広島と長崎の惨状を忘れてはならない、風化させてはならないということを改めて感じました。今後、広島や長崎のような惨状が繰り返されることのないよう祈るばかりです。また、あの惨状を繰り返してはいけないと思います。

## 平和への一歩

佐屋中学校 山里 風羽

1945年8月6日午前8時15分、広島に一つの原子爆弾が投下された。そして広島県のとある病院の上空約600m地点で炸裂し、一瞬にしてたくさんの方の命が奪われ、たくさんの方が被害にあわれた。77年前の話だと過去の話と思われることもあるが、実際には今も原子爆弾の被害で苦しんでいる人がいることを知った。

私は、非核平和広島派遣で平和記念資料館が一番心に残った。そこには、原子爆弾が落とされる前と後の広島の子供の様子や、火傷を負った人、骨で埋め尽くされている写真、焼け焦げてボロボロになった衣服、当時使われていた道具などの遺品が展示されていた。資料館にある写真、遺品、絵画があまりにも悲惨で別世界の話のように感じるほど現代とかけ離れていた。そこには背を向けたくなるほど悲惨な光景が広がっていて、戦争の悲惨さや残酷さを身をもって感じる事ができた。そこで見たものは私が想像していたものをはるかに超えていた。資料館を訪れた時に感じたあの胸を締め付けられるような思いを私は一生忘れないと思う。

また、平和の灯も私の心に残った。風の日も雨の日も平和の灯が消えることはない。その灯が消える時、それは世界から核兵器が消えた時。ボランティアの方の話を聞いて世界から核兵器を無くさなければいけないという平和への強い意志を感じるとともに平和の大切さについて改めて考えさせられた。

非核平和広島派遣を通して、私は原子爆弾がどんなものかわかっていなかったんだなと気付かされた。そして、もう二度と核兵器は使ってはいけない。このことを世界中の人たちに訴え続けることが重要だと思った。それを一番できるのが、世界で唯一の被爆国である日本に生きる私たちだと思う。私は、この非核平和広島派遣で学んだこと、見たこと、感じたことを多くの人に伝えていきたい。平和への一歩につながると信じて。

最後に、私たちは8月6日を絶対に忘れてはいけない。平和の灯は核兵器がなくなるまで消えないという。私は世界から核兵器がなくなることを心から願っている。

## 非核平和広島派遣事業に参加して

佐屋中学校 伊藤 香乃

「原爆は恐ろしいもの」きっと誰もが知っていることだと思います。では「原爆の何が恐ろしいか」と聞かれたら何と答えますか。私が今回の非核平和広島派遣で学んだ原爆の恐ろしさは、想像を絶するものでした。その中でも特に心に残ったものについて書こうと思います。

原爆が投下された1945年8月6日。それから約十年後に亡くなった少女がいました。佐々木禎子さんです。原爆の像のモデルとなった少女です。禎子さんは2歳で被爆しました。その時には、奇跡的に無傷でした。それから、運動に励み、とても幸せそうに見えました。しかし、小学校6年生の時に、白血病になったことが分かりました。それから入院しましたが、日がたつにつれ弱っていき最後は家族に看取られて亡くなったそうです。私は、この話を知ったときにとてもショックを受けたと同時に驚いたことがありました。それは、被爆してもすぐに健康被害があらわれないということです。2022年に被爆にあった方で亡くなられたのは、4,000人。今なお、原爆手帳をもちながら、いつ健康被害がより重度になるのかわからない人もいます。

広島は、平和を祈る場所です。私たちは、今回の非核平和広島派遣で千羽鶴を献上しました。禎子さんは平和公園の折り鶴とも深いつながりがあります。入院中に千羽鶴を折ると願い事が叶うという話を聞いた禎子さんは、1か月ほどで千羽を完成させたそうです。原爆の子の後ろには、たくさんの千羽鶴が飾ってあります。

私は、今回の非核平和広島派遣で原爆の恐ろしさを深く知ることができました。そして、生きることに對する考え方にも何か変化があったような気がします。今、生きている幸せを改めて感じる事ができました。実際に広島に行って学んだからこそ、深く知ることができたと思っています。

## 今、私たちにできること

永和中学校 佐藤 要

私は非核平和広島派遣事業に参加して、平和記念資料館に行った。そこでまず感じたことは「怖い」だった。聞いたり読んだりしただけではわからなかったことが、はっきりとイメージすることができてしまったからだ。そこにあった写真や熱で変形してしまったお弁当箱が、原爆の残酷さを私に教えてくれた。その資料から、原爆に対して恐怖を感じた。

今回この事業に参加するにあたって、原爆についての本を読んだ。その本は原爆の痕跡を残そうと尽力した人たちの話だった。そのとき文字から想像したものと実物ではあまりにも違っていた。

原爆ドームは原爆で崩れた状態で残っていて、資料館にはその当時から残されている学生服や三輪車があり、その時に被害を受けた人々の写真も展示されていた。それを見て、私は大きな衝撃を受けた。

平和記念式典にも参加した。そこにはたくさんの方が参加していた。始まる前から厳かな雰囲気漂っていた。みんなが原爆について深く考えていたと思う。また、式典参加者の中に外国人が思った以上にいた。その人たちの中に、広島市長の平和宣言の時、頷いている人がいたのが印象に残っている。当時の様子を想像していたのかもしれない。原爆のことを知ろうとしている人がたくさんいるということがうれしかった。世界中の多くの方が世界平和を願っているのだなと思った。

私は今回の広島派遣で、原爆についてより詳しく知り、原爆の怖さを感じた。それは資料を残そうとしてくれた人たちのおかげだ。資料館で展示されている広島悲劇を、この先の未来で二度と起こしてはいけないと改めて思った。私は広島に実際に行ったからこそ、本だけでは学べない多くのことを学ぶことができ、とても良い経験になった。だから、原爆について学ぶことはこの先も続いてほしいと思う。

## 広島で学んだこと

永和中学校 神田 龍希

僕は広島派遣事業に参加しました。本当は別の人が行く予定でしたが、怪我で行けなくなり、代わりに自分が行くことになりました。まさか自分が行くとは思っていませんでした。行くと思ったときは驚きました。広島に行くまで僕は、原爆についてあまり調べたり、考えたりすることがありませんでした。しかし、今回の広島派遣事業で歴史を知ることの大切さを学ぶことができました。

僕は原爆ドームをテレビでしか見たことがなかったのですが、実際に見ると思ったより建物が大きく、被害の状況がわかりました。原爆ドームは、77年前の8月6日、被爆しました。その時、多くの建物が次々に破壊されていったのに対し、なぜ原爆ドームは形が残っていたのか疑問でした。どうやら、爆風が真上から来ていたため、厚く作られていた壁は完全に押しつぶされず、倒壊を免れたそうです。そうしたことから原爆ドームと呼ばれるようになったということガイドさんから聞きました。僕はこの話を聞いて、原爆ドームは戦争の悲惨さを伝えるものであり、人々がこの建物を通して平和の大切さを訴えるものであると感じていました。

その後の平和記念資料館の見学では、原爆ドームのときと比べてさらに視覚的に訴えてくるものが多くありました。原爆の悲惨さを表す写真や実際に当時使われていた物などを見ると、とても心が痛くなりました。

平和記念式典ではまず、式が始まる前に被爆を経験した方たちのメッセージが流れていました。その方々は、当時の戦争を語っていました。その後は広島市長や内閣総理大臣などが前でスピーチをされ、多くの方々が花を供えていました。僕はこれを見て、戦争は悲しい形で歴史に残ってしまうのだと感じました。

僕は今回の事業に参加して、広島歴史、戦争の悲惨さを知りました。それと同時に二度と戦争を起こしてはいけないと思いました。

## We scream—私に託されたもの

永和中学校 林 ななみ

戦争はいやだ  
勝敗はどちらでもいい  
早く済みさえすればいい  
いわゆる正義の  
戦争よりも  
不正義の  
平和の方がいい  
井伏鱒二 「黒い雨」

この言葉は広島原爆被害を題材として描いた「黒い雨」に登場する。この作品は広島出身の文豪、井伏鱒二が同郷の知人から託された「被爆日誌」をモデルにして執筆した。そして、野間文芸賞を受賞するのだが、彼は同作について、モデルに対して、自分の実力不足を謝っている。託されたものを考えると、もっと上手く書けなければならぬと。このエピソードから、戦争、原爆の恐ろしさを考え、そしてその恐ろしさを伝えるために腐心してきたことが分かるだろう。

私も実際に原爆ドームや平和記念資料館、平和記念式典に参加し、原爆の悲惨さ、戦争のむなしさを肌で感じる事ができた。そして同時に、これからも伝えていかなければならぬと、心に決めた。平和記念資料館でみた私たちと同じくらい、もしかしたらもっと小さい子どもたちの遺品、写真は私の記憶にはっきりと刻まれた。遠い昔の話ではない、いつも通りの日常が急に奪われたことの恐怖と消化することのできない怒りを、私は感じた。

私は今回の広島派遣で、もう一度戦争の惨禍を繰り返さないよう、行動する決意を固めた。戦争は小さなすれ違いの積み重ねだ。だから、私は人の意見を聞く、自分の考えを絶対だと思わない。この小さなものから始めようと思う。自分ができることから行動をしてみる、これが戦争をなくし、世界恒久平和への一歩だと思う。一歩足を出したら、もう一歩足を出して進んでいこう。そして、声を上げるのだ。戦争はやめよう、と。

## 広島派遣事業を通して

永和中学校 山森 優

1945年8月6日の朝、広島街にいた何十万人もの人々の尊い命が原爆によって奪われました。今までの私は、その日に起きた悲劇について学校での授業やテレビによる情報からなんとなく知っているという程度でした。しかし、広島派遣で学んだ戦争による実際の被害は想像を絶するものでした。

原爆ドームを前にしたとき、私は息を呑みました。原爆は建物をここまで破壊するほど恐ろしいものなのか、私が立っているこの場所では被爆された方々が苦しみに耐えながら彷徨っていたのかもしれないのかなどといった大きな衝撃が私の頭の中に走りました。そのような恐ろしい核兵器が世界からなくなる日まで、平和記念公園では「平和の灯」が燃え続けています。

広島平和記念資料館には、原爆投下前後の写真や当時3歳の男の子が乗っていた三輪車、遺体の下にあった真っ黒に焼けた弁当箱などの遺品が展示されていました。それらからは当時広島街にいた人々は、今の私たちと同じようにお弁当を食べたり家族と笑い合ったりするような生活をしていたのに、それを戦争や核兵器が一瞬にして消し去ってしまったことが分かり、言葉では言い表せないほど胸が苦しくなりました。展示物のあまりの恐ろしさに何度も目を背けたくなりましたが、これが実際に過去に起きたことなのだと思われ、その時感じた怖さを心に刻みました。被爆者の方々は、辛い過去を受け入れ、復興に向けて立ち上がりました。私たちには、その思いを次の世代へと繋ぐ使命があると思います。

「本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとする事。」

広島市の小学生による平和への誓いです。全ての人々が他の人を思いやり、それに感謝の気持ちをもてば、平和が訪れます。そうして近い将来、核兵器が世界から消えた、平和の灯が消される日が来ることを願っています。

## 記憶を見る

立田中学校 小野田 尚輝

僕は将来、教師になりたいと思っています。そのために日々勉強し、頑張ってきました。特に歴史の勉強には力を入れているので、戦争や原爆について、理解しているつもりでいました。そうして迎えた広島派遣で、平和記念資料館を見学し、平和記念式典に参加したことで、僕は戦争や原爆への理解の浅さを痛感しました。平和記念資料館で見た爆発による雲、瓦礫だらけの街、人の影のついた石段、僕は言い表しようのないほどに悲惨な光景を目のあたりにしました。同時に今の日本がどれだけ平和な国なのかも感じました。1日目の派遣の夜に、その日に感じたことをメモし、一生忘れないようにしました。

2日目は、7時から平和記念式典に参加しました。そこには外国の人も多くいました。僕は一つ疑問に思いました。なぜこんなに国際的に平和を訴えているのに、戦争は終わらないのか。ここで僕は必ずこの記憶を次の世代に継承することを決意しました。そんな思いを胸に、式典が開始しました。この式典で一番印象が強かったことは、「平和への誓い、子ども代表」でした。その話はとても平和の尊さを感じさせるものでした。しかし、同時にこんなに小さな子に「死体」なんて言葉を言わせても良いのか、そう思いました。この瞬間に、戦争は繰り返してはいけないと、一番強く感じました。

戦争を繰り返さないためにはどうすれば良いのか、式典が終わった後、そのことばかり考えていました。僕はこの2日間の中で、戦争と原爆の恐ろしさと平和の尊さを改めて感じることができました。この経験は一生忘れないように生きていきます。

## 広島派遣を通して

立田中学校 黒田 淳斗

今回の、広島派遣を通して、戦争の悲惨さ、原子爆弾の恐ろしさなどを改めて痛感し、自分たちは、絶対にその過ちを繰り返さないように、後世に伝えていくことなど、様々な努力をしていこうと強く思いました。

特に今回の派遣では、広島市で行われる平和記念式典に参列させていただき、被爆者の今なお続く放射線による後遺症による被害や原子爆弾が投下された当時、どのような被害が出たかなど、詳しい話を聞くことができ、とても貴重な経験になりました。

最近では、ロシアによるウクライナ侵攻では、罪のないウクライナの国民が、命を奪われる行為が毎日のように繰り返されています。そんな中、世界では、核兵器による抑止力なくして平和は維持できない、という考えが勢いを増しているなど、核兵器のない世界には程遠くなってきていることを、最近のニュースを見ていて、すごく思います。そこで、今回の平和記念式典で、広島市長さんが、紹介して下さった言葉で、「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ」この言葉を、世界で初めて、そして現在、唯一の被爆国である日本が中心となり、世界へと今後も発信していくことが、核廃絶への一番の近道であると僕は思います。

この広島派遣に行く前、僕は、本当に他人事に考えていて、今は平和だから大丈夫。といった考えをしていました。ですが、今回、いろいろな資料を見たり、いろいろな人の話を聞いたりして、当時の悲惨な状況を知り、そんなことを起こさせてはならない。と自分事のように考えるようになりました。今回の経験を糧にして、後世に伝えていくために、何ができるのかを考えていきたいと思えます。

## 広島派遣から世界へ繋ぐ

立田中学校 岡部 乃希美

非核平和広島派遣事業に参加し、改めて平和の尊さや大切さを実感した。特に原爆ドームは写真で見るとでは全く違う迫力を感じた。あの日、原爆という恐怖が落ちた時の人々はどんな感情だったのか。私は複雑な気持ちで原爆ドームを眺めた。ドームの中は骨組みだけ残っており、その悲惨さが見ただけでわかった。原爆で多くの方々が亡くなり、その中には動員された中学生もいて、今私たちがどれだけ幸せで平和なのかと思った。

平和記念式典で被爆者のビデオメッセージの上映で数少ない被爆者の体験を聞き、心に刺さった。核兵器の恐ろしさ、戦争の醜さを語った。ガイドの方、被爆者の方がみんな口を揃えて言った事は、「あなたたちがこれから伝えていく。」という言葉。被爆者の平均年齢が80歳を超え、原爆や戦争について伝えられる人が減少している今、二度と原爆の恐ろしい光景をこれからの未来でも見ないように被爆者の方々が作り上げてきた平和を無駄にしないように若い世代がつなげていくことが大切だ。

世界ではまだまだ核兵器を所持している国が多くある。唯一の被爆国である日本が世界に平和を訴えていくべきではないのか。原爆投下から77年。戦争や原爆で苦しめられた人々のためにも世界から核兵器という戦力を捨て、いつか平和記念公園にある平和の灯を消せるように今私たちにできる「伝える」ということをやっていくべきだ。

## 伝えていく平和

立田中学校 神田 和奏

私は広島派遣事業を通して戦争の恐ろしさを学び、改めて普段の日常の大切さに気付かされました。

1945年8月6日8時15分。広島に原子爆弾が落とされました。建物は破壊され、激しい爆風が吹き、多くの尊い命が奪われました。平和記念公園には、77年前のあの日の状況を想像させる「原爆ドーム」がありました。私は実際に見た事はなく、テレビや新聞でしか見たことがありませんでした。原爆ドームを初めて近くで見たとき、胸が締め付けられる思いでした。周りには瓦礫が散らばり窓はありません。建物だけでもこんなにも破壊してしまうのです。原子爆弾はあってはいけないと改めて思い知らされました。平和記念資料館では、苦しそうに歩く人々の絵や、焦げたお弁当や破れたワンピースなどが展示されていました。人々の不安で苦しそうな表情を見て、私はとても空悲しい気持ちになりました。原子爆弾は罪のない関係のない人も巻き込んだのです。私たちはこのことを二度と繰り返さないために何をしていくのかを考えなければいけません。

あの日起こった出来事を、二度と繰り返さないために多くの人が立ち上がって次の世代へと伝えてきました。しかし、戦後から77年経った今、戦争の関心が薄くなっています。そのために私たちができる事は戦争の記憶を途絶えさせないことだと思います。命は尊いものです。その命を無差別になくしてしまう戦争は恐ろしいものです。もう人々から笑顔を奪われない奪わないために、一人一人が意識をして平和な世の中を作っていかなければいけません。私はこのことが平和な未来につながると思います。

## 記憶と願い

八開中学校 関野 創大

原爆という悲劇への大きな一歩とそれと歩み続ける多くの犠牲者の悲惨な運命。原爆ドームを見た時に僕は迫力と虚しさを感じました。原爆が投下されてもなお耐えた原爆ドームの凄さと、後世へと繋いでいく一つの大きな原爆の記憶。それはやはり、圧倒的なものがありました。しかし、僕は被害を受ける前の原爆ドームを見たことがありました。それは白く、堂々とした美しい建物でした。それが一瞬にして、黒ずみ、中が見えてしまうようになってしまおうと思うと果敢ないものだと思います。簡単に素晴らしいものを壊していく原爆はとても苛立たしいものです。

広島平和記念資料館で見た広島の姿は、今の日本とは似ても似つかない荒れ果てたもので、そこには倒れ並ぶ多くの犠牲者の姿もありました。僕はそれを見た時に愕然としました。平和という言葉の重要性、重み、そして言葉にすることのできない、見て伝えることしかできない本当の意味を知りました。世界にはまだ核を所持している国があります。ぜひ核を持つことに賛成している人たちに一度資料館に訪れて僕が見てきたものすべてを目に焼き付けてほしいです。きっと考え方が変わると思います。

僕は今回広島派遣に参加し、とても良い経験ができたと思います。原爆の卑劣さを被災地で感じることができ、世界が平和へ進まなければならないことを強く思いました。世界の人が忘れてはいけない記憶を伝えていくことなど、自分のできる最低限のことをしていきたいと思いました。

## ヒロシマ

八開中学校 安田 有希

私は、広島原爆について教科書に載っている程度の知識しかありませんでした。しかし、テレビでピカドン先生こと坪井直先生の番組を観て本当の原爆の悲惨な真実を知りました。そして、広島に行ってみたく強く思うようになり、愛西市の広島派遣に応募しました。

広島に到着して1日目に原爆ドームに行きました。実際の原爆ドームは、レンガがほとんど剥がれ落ちていて、屋根のドーム部分は鉄筋が剥き出し状態でした。写真で見た時の印象より原爆の悲惨さを痛感しました。原爆ドームだけは、77年前からずっと同じ場所にあり原爆が投下された時から時間が止まっていると思うと余計に悲しい気持ちになりました。その後に原爆の子の像に行き、みんなで平和を祈りながら折った千羽鶴を捧げました。

次に平和記念資料館に行き、展示品を見ましたが、原爆による爆風、熱線、放射線による被害は私が想像していた以上の悲惨なものでした。特に印象的だったのは、原爆の被害を受けた人の写真や実物の物です。衣服は、ボロボロになり、血を流し、泣いている親子の姿でした。

2日目は、平和記念式典に参加しました。世界中から多くの方々が参加され、原爆が投下され8時15分に被爆で亡くなられた方々に「安らかに眠りください」と思いながら黙祷を捧げました。その後、来賓の中で、グテーレス国際連合事務総長から「現在、核の脅威が世界各地に急速に広がっているため、今こそ世界は、広島で起こったことを決して忘れてはいけません。そして、平和を拡散させるべき時だ。」との挨拶がありました。

私も現在は、戦後77年間で、核戦争が起こりうる一番危険な時期なので、今こそ広島悲劇やピカドン先生が訴え続けてきた「ノーモア・被爆者」を世界に伝えていかなければいけないと強く思いました。

## 私が今伝えたいこと

八開中学校 可知 紅実

想像を絶するほどの現状。私が見た被爆の現状は、言葉には表せないほどの衝撃でした。全身に火傷を負った人々、幾つもの頭蓋骨、黒く焼け焦げた人々。たった一発の原爆が、一瞬にして広島の人々の当たり前の日常や、希望のある未来を奪いました。広島原爆は、二度と起こしてはいけないことです。

今回、平和記念式に参列し、心に残っている言葉があります。それは、『過去に起こったことを変えることはできません。しかし、未来は創ることができます。』という言葉です。これは、平和への誓いの言葉の一部です。確かに、過去に起こったことは、もうどうしようもできません。しかし、未来は、人間の行動によっていくらかでも創ることができます。私たちが今できることは、次の世代に広島原爆の悲惨さを伝え、被爆者の想いを伝えることです。人間の知識と知恵を戦争に使ってはいけません。

また、『自分も周りの人も大切に、互いに助け合うこと。』という言葉も心に残っています。これは、自分に置き換えて考えられる言葉です。互いに助け合って、自分という存在を大切に、支えてもらっている周りの人にも感謝していくべきだと思います。

広島原爆は、たくさんの人に大きな被害をもたらし、一瞬にして広島を焼け野原にしました。このようなことは絶対に起きてはなりません。世界から核兵器がなくなるまで、広島人は平和を祈り続けています。

No more ヒロシマ、No more 原爆

## 伝えていく大切さ

八開中学校 伊藤 榛香

私が広島に行き、印象に残ったことは二つあります。

一つは平和式典での『平和への誓い』についてです。『平和の誓い』は広島市の小学6年生の2人の子が読んでいました。ハキハキと一文一文に込めた思いが伝わりました。「過去に起こったことを変えることはできません。しかし、未来は創ることができます。」この言葉が強く心に刺さりました。日本に原爆が投下されたのは過去のこと。今の私たちはこの事実を変えることはできません。でも過ちによって未来をより良くできる。そんな意味が込められているのだと感じました。

二つ目は資料館で見た原爆時の衣類や写真などです。衣類の中には原型の留まっていないものもあり、写真には怪我のため苦しんでいる人の姿、肋骨がくっきり見えるほど細くなってしまった子供の亡骸がありました。資料だけでもどれだけ苦しいのか、よくわかりました。

原爆が広島に投下されてから77年の月日が経ちました。77年経った今でさえ、後遺症を持っている方もいます。広島に行ったあの日、私は「二度と繰り返してはいけない」という言葉を何度も聞きました。原爆の恐ろしさ、一瞬にして全てを失う恐怖、これは何度も繰り返していいわけがありません。この学習で私は人に伝えていく大切さを学びました。

## 未来永劫平和であるために

佐織中学校 浅井 陽翔

僕は、非核平和広島派遣事業を通して、過去に起こった広島の方の悲しい出来事を知りました。

8月5日・6日に、僕たちは広島へ行きました。広島は長崎と共に、世界中で唯一原子爆弾が投下された都市です。原爆投下による悲しい出来事は、1日目に訪れた平和記念資料館に残されていました。そこには、悲しい出来事を物語る写真が多くあり、僕は見ていて戦争の恐ろしさを改めて知り、これからは絶対に起こってはいけないことだと思いました。また、2日目は平和記念式典に参加し、多くの方々からお話をいただきました。その中で、特に印象に残っているのが、こども代表による「平和への誓い」です。核兵器の恐ろしさや、平和を保つために僕たちが行動しなければならないという話を聞いて、核廃絶の重要性を知ることができました。

今回の派遣事業に行く前までは、平和であることが当たり前だと思っていましたが、戦争や原爆について見たり聞いたりして普段の生活がどれだけありがたいことなのかを知ることができました。

過去はもう変えることはできません。しかし、これからの未来をよくしていくことはできます。そのためには、ひとりひとりの平和への思い、核廃絶の呼びかけが重要だと思います。僕も多くの人に非核平和広島派遣事業で学んだことや平和である尊さを知ってもらうため、呼びかけていきたいと思っています。

## 平和への願い

佐織中学校 中野 里美

私は、今回の広島派遣を通して、日本国内ではずっと戦争がなく、安全・安心に暮らせていることに感謝しました。

1日目、原爆の子の像の周辺で千羽鶴をお供えしました。たくさんの千羽鶴を見て、私はそこで多くの人が平和を願っていることを感じました。その後、初めて原爆ドームを見ました。本などで見たことがあったけれど、実際に破壊された建物を見て、恐ろしさに圧倒されました。

1日目で一番印象に残った場所は、広島平和記念資料館です。黒焦げになったお弁当や三輪車、焼けてボロボロになっている衣類など、さまざまな展示物がありました。また、熱戦や爆風、放射線などによって苦しんでいる人の写真や絵をたくさん見ました。たった一発の爆弾でおこった被害の恐ろしさに私は言葉を失いました。

2日目、平和記念式典に参列しました。朝早くから多くの人が訪れていました。私は原爆で犠牲になった人たち、病気やけがに苦しんでいる人たちに祈りを捧げました。そして、今、世の中で起きている紛争が終わり、核兵器のない平和な世界を願いました。

私が広島に行って感じたことは、想像していたよりもとても都会で人通りも多く、明るい街並みだったことです。原爆の被害を見た後では、たくさんの人たちの復興への努力が伝わってきました。とても大変だったと思います。

原爆についてはテレビやインターネット、本で知ることができます。しかし、私は世界中の人たちに広島に来てもらいたいと思いました。今も「原爆が必要悪だった」「核兵器は抑止力になる」などの意見があります。とても悲しいです。広島に来て資料館などを見てもらい、原爆投下の悲劇、被爆者の苦しみを知ってもらいたいです。

私も実際に見て、より核兵器の恐ろしさを感じました。そして、このようなことが二度と起こらないように、私には何ができるか考えました。被爆者の方たちが語ってくれたつらい体験、原爆の悲惨さ、恐ろしさを、伝え続けていこうと思います。

## 平和な日々を願って

佐織中学校 小林 京平

「二度とあの日の出来事は起こってはいけない」

これは、私が広島に行ったときに、被爆体験者が語っていた言葉です。私が今回広島派遣に参加した理由は、戦争の悲惨さを自分の目で確かめ、学んだことをたくさんの人に伝えたいと思ったからです。

実際に原爆ドームを訪れてみると、今まで感じたことのないとても恐ろしい感覚に襲われました。たった一つの爆弾によって、それまで笑顔で楽しく過ごしていた人々の生活が瞬く間に奪われたと思うと、いたたまれない気持ちになりました。平和記念資料館では、原爆で割れたガラスによって血だらけになった服や、熱線で深いやけどを負った人たちの写真などがありました。原子爆弾が爆発するときに見える火の玉の中心部は100万度を超え、そこから出た熱線は約4,000度に達するというのを知りました。太陽の表面温度は約6,000度なので、どれだけの人がこの高熱に苦しんだのか、想像もできませんでした。平和記念式典が行われた平和記念公園では、平和を願って建てられた建造物がたくさんありました。

例えば、犠牲者を慰め、核兵器廃絶を希求するために建てられた平和の灯。この灯は、「核兵器がこの地球上からなくなるまで燃やし続けよう」と思いを込め、1964年8月1日に点火されて以来燃え続けています。他にも、原爆の子の像があります。像のモデルである佐々木禎子さんは、2歳で被爆し、後遺症の影響で白血病になり、12歳で亡くなりました。禎子さんは入院中「生きたい」という願いを込めて千羽以上の鶴を折り続けたそうです。禎子さんの思いをこの先も伝えていくために、今でも平和を願って世界中から鶴が捧げられています。この禎子さんたちの行動が世界を動かしたことはすごいことだと思いました。私も実際に折り鶴を捧げたときに、より一層、「戦争はもう起こらないでほしい」という思いが強くなりました。さらに、平和記念式典にも参加しました。式典での言葉は一つひとつがとても重く、あの日起きた出来事を物語っていました。私は、「今ある日常が永遠に続いてほしい、世界中が平和であるように」と願い、黙祷を捧げました。

私は今回の派遣事業でたくさんの方のことを学んで、普段の生活に対する感謝が足りないと感じました。自分が生きている「今日」は戦争や原爆で命を落としてしまったたくさんの方々が生きたかった「未来」であること、また、昨日亡くなってしまった人たちが生きたいと願った「明日」であることをしっかりと胸に刻んで過ごしていきたいです。そして、世界中のすべての人が、何も怯えず幸せに平和な日々を生きたいと思いますように。

## ヒロシマを知り平和な未来を考える

佐織中学校 浅野 翠月

日本人にとって忘れてはいけない8月6日。77年前のこの日、原爆が投下され、町一面を焼け野原にされた地『広島』を初めて訪れました。

今の広島の街を歩いていると、本当にこの場所に原爆が落とされ、たくさんの命が一度に奪われたのかと思うほど、緑が生い茂り、ビルが立ち並んでおり、悲惨な歴史があったことを感じるできませんでした。

しかし、平和記念公園に一步足を踏み入れると、教科書に載っている小さな写真で見たことのある原爆ドームが目飛び込んできました。想像より大きなドームは写真で見たものとは迫力が全く違いました。ほとんど崩壊してしまっている外壁や、露わになった鉄骨を初めて直に見ると、その無残な姿に声も出ませんでした。

また、平和記念式典前日に平和記念資料館にも訪れました。そこには被爆前後の広島の市街地映像を投影しており、原爆投下時刻の午前8時15分で時を止めた時計、全身火傷を負った人の写真、黒く炭になった弁当箱のご飯など、原爆投下を象徴する品が展示されていました。それらは想像をはるかに超え、目を背けたくなるようなものばかりでした。私は大きな衝撃を受け、心が痛みました。それらを見て、この地で何気ない日常を一瞬にして奪われた歴史があったのだとやっと実感しました。

ある国は、隣国に核による威嚇を行うなど、核兵器をめぐる緊迫感が増しているそうです。そんな今、平和記念式典では、広島市長が「核兵器のない世界を夢物語にさせない」という平和宣言をされていました。世界で唯一原爆の被害を受けた日本。核の恐ろしさを一番知っている国も日本だけです。その地、広島からのメッセージはひときわ重みがあります。しかし、原爆投下から77年もの年月が経った今、被爆者の平均年齢も84歳と高齢となり、直に伝える人も少なくなっているのが現状です。だからこそ現代に生きる私たちが、後世に戦争の悲惨さ、残酷さ、そして命の尊さを途切れることなく伝える責務があるのだと思います。広島で起こった過去は変えられません。しかし、未来に向けて平和は発信できます。核のない未来を考えることが、世界平和への一歩にもなると私は思います。

## 平和をつなぐ

佐織西中学校 安立 萌杏

「もう二度とこの地獄を味わって欲しくない。」被爆者の方々はみな口を揃えてそう言います。それほど、原子爆弾というのはたった一発、たった一瞬で大勢の人の日常を奪い、運良く生き延びることができた場合でも、放射線による後遺症によってその後の人生まで狂わされてしまいました。

このような世の中で、原爆を過去の出来事にはできません。今でも世界に核兵器を持った国が何ヵ国もあります。それに、今一番騒がれているウクライナ侵攻で、世界情勢は大きく崩れ、ロシアは核の脅威をちらつかせています。

広島派遣事業を終えた私の願いは、「核を使用することなどありえないし、あってはならない」と思います。たった77年前、火傷に苦しみ、水を求め大勢の人が飛び込んで行った川を見て、無差別に爆撃を受け、家族とは離れ離れのまま命を奪われ沢山の人が横たわった地に立って、核の恐ろしさを物語った原爆ドームを見て、被爆者の方々のずんと重い言葉や平和への切実な願いを聞いて、平和について深く考えました。そして平和記念資料館では、被爆体験がリアルに描写された絵や、当時の様子が想像できる写真、被爆した物や、原爆で亡くなった方の遺品など、全ての展示が思わず目を背けてしまうほど衝撃的で今でも脳裏に焼き付いています。きっと忘れることはありません。

この広島・長崎での原爆が最後であって欲しいし、もう二度と過ちは起きてほしくありません。

そして、私はこの広島派遣事業を通して、平和は願うものではなく創るものだと思います。今の広島や日本が平和であるのは、戦争で犠牲になった人々が努力を重ねて創り上げてきたからです。被爆者として、戦争体験者として、人生をかけて戦争の恐ろしさや平和を伝えてきた方がみえるからです。そんな方々の言葉を直接聞くことができた私たちは、後世に平和の大切さを伝えていくことができます。

私は唯一の被爆国民のひとりとして、被爆者の方々から受け継いだ使命を全うしていきます。世界が平和であるために……。

## 平和に向かって

佐織西中学校 伊藤 陽

私は、8月5日、6日に行われた非核平和広島派遣事業で初めて広島へ行き、戦争や原子爆弾についてさまざまな場所を訪れ、見学し、多くのことを学んできました。

今では建物が建ち並び、自然も豊かな広島。ここに昔、原子爆弾が落とされ、それからまだ77年しか経っていないことが信じられないくらいでした。

しかし、平和記念公園の中にあるいくつもの慰霊碑や記念碑、資料館などを見て本当にあったことだと改めて理解しました。

特に、私の心に残ったものは、動員学徒慰霊塔です。

私たちと同じくらいの歳の子が学ぶことができず働いて、たくさんの命が失われてしまったこと。学校へ行くことや安全に暮らすことという現代の私たちにとって当たり前のことがその時代の人にとってそうではなかったこと。このことが動員学徒慰霊塔によってはっきりと示されていました。

原子爆弾を投下する指示を出すのも、それほどまでに戦争を激化させ長引かせたのも国の偉い人たちです。ですが、被害は偉い人たちだけでなく一般人にも及び、何十年と苦しみ続けました。

そんな過去がありながら、学ばずに戦争をする、原子爆弾を持つ、とても悲しいことだと思います。

明日は我が身という言葉があるように、いつかは自分が被害者又は加害者になっているかもしれません。そうならないためにも、一人でも多くの人が少しでもいいので、調べて知ろうとしてみしてほしいと思います。

亡くなった人は話すこと、伝えることができません。その分、もう二度と悲劇がくり返されないよう語り継いでいくことが今を生きている私たちの役目だと思います。原子爆弾が世界から消え去り、被爆者や遺族たちの祈りが報われ平和な世界になることを私も心から願っています。

## 平和を世界に

佐織西中学校 安部 純之介

原爆投下から77年。多くの出来事を経て社会が大きく変化した。

被爆後、「広島には75年間は草木も生えないだろう。」と言われたが、平和記念公園は緑で囲まれていて、自然の強さと人々の懸命な努力の証だと感じた。だが、原爆ドームの周辺だけは空気が違った。壁のレンガが崩れ落ち、空洞になった建物を吹き抜ける風、日光に照らされた頂上の剥き出しの鉄骨。全てが当時の情景を物語っていた。正面を流れる元安川を見ながら僕は思った。原爆が投下された日、熱線で地上の温度は4,000度にも達し、放射性物質を含んだ黒い雨が降り注ぐ中、多くの人々が水を求めて川に飛び込み命を落とした。原爆の記録は今なお広島市内に深く刻み込まれている。決して忘れてはいけない事実と、戦争被爆国として語り続けなければいけない歴史があると強く感じた。

僕が特に心に残ったのは、動員学徒慰霊塔だった。中等学校以上の生徒に勤労奉仕が強制され、国のために働いていた動員学徒6,300人が原爆の犠牲になった。今の時代に生きている僕は当たり前のように学校で学び、将来の夢もある。それなのに77年前、同世代の若者が大人になれないまま命を奪われた。何の罪もない人達へのあまりにも残酷な戦争の理不尽さに胸が痛んだ。

平和記念資料館では、原爆で焼けたぼろぼろの服や黒焦げのお弁当などの遺品と、熱線で皮膚がただれた人や無数の焼けた遺体、全身に出た血の斑点の写真を見たとき、思わず逃げ出したくなった。想像を絶する被爆者の現実がそこにあり、悲しみや無念の思いが溢れていた。僕は言葉が何も出てこず、頭が真っ白になってしまった。でもこれが、過ちを繰り返して戦争をしてはいけない理由だという事が、はっきりと分かった。

平和記念式典に参加し、戦争被害は終戦で終わらず、被爆者のその後の人生にも辛く及んでいることを風化させてはいけない、日本国民として、私たちの世代は未来に活かす役目があると改めて感じた。国境を越えて、命を尊重しあえる平和な世界であってほしい。



## 後記

この度、令和4年度非核平和広島派遣事業に参加した23名の生徒の感想文をまとめ、冊子を作成しました。

派遣生徒及び引率教諭には、原爆ドーム等の平和関連施設の見学、平和記念式典への参列を通じて、戦争の恐ろしさや平和の尊さなどについて学んでいただきました。また、市民の皆様にお寄せいただいた折鶴で作成した千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納していただくなど、市民の皆様の恒久平和への願いの橋渡し役も務めていただきました。派遣終了後の8月9日には、愛西市文化会館において、「平和祈念式」が挙行され、多数の派遣生徒が参加されました。

また、9月下旬から10月にかけて、各中学校において派遣生徒による事業報告会が実施されました。本事業の担当として各中学校を訪問し、発表を静聴する中で、生徒の皆さん一人一人が、事業への参加を通じて、これから先、戦争を経験した先代の方々の平和への願いを受け継ぎ、命や平和の尊さを後世へ語り継いでいかなければならないという意志を持ったことが伝わり、感銘を受けました。派遣生徒は、発表を聞く校内生徒の方々に対し、訴えかけるように平和への誓いを述べ、校内生徒の方々が耳を傾け、真剣な表情で発表を聞き入

っていた姿がとても印象的でした。

本事業は参加された方々にとって、平和について考える有意義な機会になったのではないかと考えております。

本稿の感想文には、生徒自身が実際に現場を見て感じたこと、考えたことなどが綴られています。

この事業を通じて、戦争の記憶が風化されることなく、平和の尊さ、戦争の恐ろしさ、恒久平和への願いが将来を担う若い世代へと語り継がれていくことを切に願い、結びとさせていただきます。

